周縁（マージンズ）とニューロダイバーシティ——大江健三郎『水死』におけるケアの記号論

マルゲリータ・ロング
（大﨑晴美訳）

キーワード：大江健三郎、ケア、ニューロダイバーシティ、『水死』、周縁性

ケア労働と記号論の間の関係とはどのようなものだろうか。フクシマの直前・直後の大江健三郎の著作は、この問いを興味深い仕方で提起する。

一方で、大江は公的な発言で、反核と憲法九条擁護の主張を明確に打ち出しており、こうした主張で何十年にもわたって名を馳せている。他方で、彼の発言は、こうした主張そのものの無益さ——つまり、彼の左翼的な民主主義の理念が、その対極にある右翼的な権威主義の理念を常に支えているように見える様子——を彼が自覚していることを仄めかしている。言い換えれば、柄谷行人が『歴史と反復』で提示する以下の主張を、大江が認めているように見えるのだ。柄谷曰く、「こうした二重性の「腑分け」は、それ自体危ういものである。それらはけっして分離できないからだ。一方を肯定して他方を否定するというわけにはいかない。」[1]

本論文では、二重性と危うさについての柄谷の思想の再考を促したい。この思想は、ラカンを介して広く知られるようになった、意味作用についてのソシュールの定式に由来する。柄谷のモデルでは、さまざまなシニフィアン（「右翼」、「左翼」、「平和主義者」、「国家主義者」）は、彼が「埋めがたいずれ」[2]と呼ぶものによって機能し始めた後は、意味に関して相互に依存し合う。このずれは、それ自体としては表象不可能なもの、アポリアである。大江のフクシマ以後の発言中には、知的障害を持つ彼の息子・光（ひかり）がまさにそうしたずれの中に陥ってしまっていると心配する大江の姿が見受けられる。このずれの中では、光の父親は、息子を愛することも彼の世話（ケア・フォー）をすることもできないのだ。しかし、このずれは表象不可能なものとは程遠い。それは、自主自律を提唱する自閉症の人々が、ここ二十年の間に「ニューロダイバーシティ」という名前で呼び始めたものが生み出す活気に満ちた場なのである。本論文で私は、大江の2009年の小説『水死』を精読し、そこで障害を持つ息子の音楽的感性が簡潔に、しかし生き生きと描写されているさまを分析する。ニューロダイバーシティの理論の中心的な主張の一つは、神経学的（ニューロ）に多様（ダイバース）な脳が、初動の時点での「ずれ」もしくは隔たりなしに、世界の意味を作り出すというもので

1
柄谷行人『歴史と反復』、『定本柄谷行人集』第五巻、岩波書店、2004年、69ページ。Kōjin Karatani, *History and Repetition*, edited by Seiji M. Lippit, New York: Columbia University Press, 2012, p. 55.

2
前掲、118ページ。Ibid., p. 96.

ある。私は、これが大江の息子個人の記号論にとって何を意味するのかを探求しつつ、『水死』という作品が、父・大江の重層的に決定された政治的二極性に対するオルタナティヴのみならず、息子にとってのセルフケアの重要な一形態をも描き出していることを示す。

井上ひさしの欄外注（マージン・ノーツ）——愛、光、「最後の長編小説」

柄谷が『歴史と反復』で大江を論じた章は、1967年の小説『万延元年のフットボール』に焦点を当てている。柄谷曰く、大江の天賦の才は、戦後日本の歴史が戦前の日本の歴史に依拠しており、実のところ常に戦前の歴史を反復するよう釣り合いをとっていると看破する彼の能力にある。大江の小説の登場人物たちは、安保反対闘争に参加して暴力を拒否しているかもしれないが、彼らには分身がいて、それが明治時代以降民主主義や人民の権利に反対してきた当の同じ天皇制ファシズムに彼らを結びつけている。柄谷にとって、この点で大江は竹内好に似ている。1942年、日本浪曼派の詩人たちと京都学派の哲学者たちを集めた悪名高い会合が開催された。この会合は「近代の超克」座談会の名で知られるが、1950年代後半に竹内がこの座談会を再評価した時、彼はこの会合を、「ファナティックな復古主義、天皇主義、排外主義、帝国主義のイデオロギー」[3]集団というありきたりなやり方で断罪しはしなかった。むしろ竹内は、座談会に集まった人々が、十九世紀以来日本の政治を突き動かしてきたすべての対立の激化——「爆発」——として当時の戦争を理解できなかったことを嘆いた。その対立とは、孤立対開放、超国家主義対「文明開化」、アジア侵略対アジア解放等といったものであった。竹内にとって、解決とは「戦争の二重性格」[4]を見据えてこれらの矛盾を解消することだったのだろう、と柄谷は解説する。竹内は、「近代の超克」座談会がそれをなしえなかったのを遺憾に思っているのだ。

柄谷が大江を好意的に評価するのは、竹内とは違い、大江が決して解決を目指していないという点である。柄谷によれば、さまざまな対立物がお互いから独立には存在しえず、それらの間のずれこそが近代日本史を生み出す否定性なのだ、ということを大江は知っている。表象のシステムを根拠づけるのは、「表象のシステムそのものを可能にしている「穴」」もしくはアポリアである、という柄谷のヘーゲルーラカン的な確信がここに見て取れる[5]。この穴と決別すれば、歴史が崩壊してしまうだろう。だからこそ柄谷は、竹内の望みがかなうとしても、それは「危ういもの」[6]だろう、と述べている。柄谷によれば、これとは対照的に、大江が求めるのは、一人称（「僕」）の語り手を使って、歴史と感情の両方の観点から見た、戦後民主主義の誤謬を指摘すること

3
前掲、229ページ。Ibid., p.181.

4
前掲、69ページ。Ibid., p.55.

5
前掲、6ページ。Ibid., p.3.

6
前掲、69ページ。Ibid., p.55.

である。戦後民主主義は、その構成的外部から切り離されて浮遊しているのだ。大江のフィクションに出てくる語り手は、戦前の暴力、戦前のファシズム、戦前の外国人嫌悪——戦後期にすべてタブーになった歴史的真実——の「言説空間」を「解放させる」[7]ために存在する。その一方で、大江のノンフィクションの語り手は、全く逆のことをする。これらの歴史的真実を抹消されたままにしておくのである。柄谷は、このようなノンフィクションの語り手を退ける（「こうした言葉を、大江健三郎がエッセイや発言でかりそめにも語ることはありえない」[8]。それはあくまでも異例（アノマリー）であり、「敬遠されるほかはないだろう」[9]、というのが柄谷の見解である。

言い換えれば、柄谷によれば、フクシマ以後の活動家としての大江の発言を読むのは時間の無駄だろう、というわけだ。しかし、特筆すべき講演が一つあり、それが記号論と政治についての全く別の思考法に扉を開くように私には思われる。それは「九条を文学の言葉として」と題された講演であり、大江は2011年4月鎌倉九条の会のつどいでこの講演を行った。当初は、九条の会の共同よびかけ人であった井上ひさしの一周忌に当たり故人を偲ぶ計画であったが、その会合が「惨禍のあとをどう生きるか考えつつ、あらためて、憲法の精神と、井上ひさしの遺した言葉を」[10]問う機会となった。そこで大江は、1950年初めの広島を舞台とした井上の1994年の戯曲『父と暮らせば』の精読を披露している。それは父と娘の物語であり、深い愛情の絆で、核爆発による大惨事の後も死んだ親が生きている子供を見守る（テイク・ケア・オブ）。大江は井上の例とは逆に、フクシマは自分と妻が死後も息子の光を見守る（テイク・ケア・オブ）のを不可能にしてしまっただろう、という懸念を口にする。

これは、この時期の大江のテクストの中で、余白（マージナリア）への書き込（マージナリア）みが大きな力を発揮する多くの場面のうちの一つである。井上の死後、彼の妻ユリが大江に一冊のノートを送った。それは1950年代半ば、二人の男性が二十代半ばだった頃に書かれたものだった。当時、大江は短編小説で有名だったが、井上はノートに次のように書いていた。「大江の小説を読むと、そこには愛というものがない」。「あらゆる愛から、彼が門外漢であるだろうことは、容易に想像できる。大江氏は長編ですぐれたものを書くことはできないのではないかと危惧する。長編では、愛を描くほかなにものをも描けないからだ。」約五十年後の2011年、大江は多くの長編小説の執筆を経た後、鎌倉の人々の面前で、井上の言った通りだと認めている。「たしかに私には、一生の仕事を振り返ってみて、恋愛小説というものはありません。」[11]それから彼は、ユリが次にまとめて送ってきたノートについて論じる。これらのノートは、井上の持っていた『水死』の余白（マージンズ）に書き込まれていたものである。大江はこの作品が出版されるとすぐに井上に一部を送り、井上は肺がんの闘病中に病床でそれを読んだ。この小説は、主人公・長江古義人（ちょうこうこぎと）〔作中の多くの場面では「コギー」と

7
前掲、132–133ページ。Ibid., p.107.

8
前掲、132ページ。Ibid., p.107.

9
前掲、115ページ。Ibid., p.94.

10
大江健三郎「九条を文学として読む」、大江健三郎・内橋克人・なだいなだ・小森陽一『取り返しのつかないものを、取り返すために——大震災と井上ひさし』、岩波ブックレットNo. 814、岩波書店、2011年、2ページ。

11
前掲、42ページ。

呼称される。訳者補足。〕と、知的障害を持つ彼の息子アカリの間の「衝突」と大江が呼ぶものに焦点を当てている。井上は、父と子の和解に納得がいかず、次のように書いていた。「圧倒的なアカリ君の存在、真に人間的な事柄以外では和解しない」[12]。井上はまた、次のようにも書いていた。「アカリ君は、ほんとうに本質的なことでなければ和解しない」[13]。井上は、アカリの存在を「圧倒的」と呼ぶことで、彼の存在が古義人の中に踏み込んできても古義人は応答できないのだと仄めかす。なぜなら、古義人は「人間的な」ものに縛られているからである。井上は、アカリの感性を「本質的」と呼ぶことで、彼の感性が超人間的なものに向けられているのだと仄めかす。はからずも、井上による余白への書き込みは、ニューロダイバーシティ運動の三つの中心的主張の核心に触れている。その主張とは以下のようなものである。第一に、「人間的な」言語が一般に可能にするよりもずっと広範にわたり強度の高い関係で世界に関わるような脳も存在する。第二に、私たちはこうした脳を病理化するよりも、それに価値を認めて、そこから学ぶべきである。第三に、病理化しないことは、こうした脳で思考し感じる人々を愛するために本質的である。

大江は井上のノートを極めて真剣に受け止め、九条の会の同志たちの前で、ついに自分の愛をきちんと表現する最後の小説を書くと誓う。そしてそれに際して、「アカリを総合的に見直したい」[14]と述べる。大江曰く、「向こうの世界の井上さんに、「私は、アカリにたいしての愛というものを書きました。つまりこれは長編小説となってるのじゃないでしょうか」ということを呼びかけたい」[15]。大江は、これまでずっと自分の文学を通じて息子を愛してきたと公言するものの、それが十分ではなかったとも言う。彼の文学上の業績は、あの原発事故以来無視できないものとなっていた「真っ暗な壁」の前では取るに足りないものだ、と。

> 私は、これまで自分の障害をもった子どものこと、彼のほんとうのことを書いてきました。そこで、作品ごとにある世界をつくってきたけれど、つまりそこに愛も希望も表現したとは思います。しかし現実の、障害をもつ子どもの父親、母親として、私らは自分たちがいなくなったあとの息子ということでは、自分らにどうしようもない不安があり、そこに大きな、真っ暗な壁があることを認めざるをえない。けれども、その壁の向こうに、いくらかでも明るい眺めを開いていくという文学的な工夫をやりとげられれば、それが私の人生で、おそらく最初で最後のほんとうの長編小説になると思います[16]。

この二ヶ月後の大江の発言から、「アカリを総合的に見直したい」という彼の計画が、2011年4月にはすでに進行中だったことがわかる[17]。大江は2010年に『晩年様式集——イン・レイト・スタイル』の執筆に着手した。この作品は、

12
前掲、42ページ。

13
前掲、43ページ。

14
前掲、43ページ。

15
前掲、43ページ。

16
前掲、55ページ。

17
大江健三郎『読む人間』、集英社文庫お18-3、集英社、2011年、245ページ。

2013年に出版された時点では、彼の最後の小説となるはずだった。このタイトルは、エドワード・サイードの最後の作品『晩年のスタイル』(2006年)になぞらえたものである。この著作は、作曲家、小説家、詩人の晩年の作品の中にある「内的緊張」を理論化するものだが、サイードによれば、この緊張は決して解消されることがない。なぜなら、「より高次の総合によって解消されたり懐柔されたりしない」ことが、この緊張を定義する特徴だからである」[18]。読者はある種のアイロニーを感じずにはいられない。なぜなら、『水死』における父と子のいさかいは、他ならぬエドワード・サイードその人から古義人に送られた楽譜に、アカリがボールペンで書き込みをしたせいで起こるのだから。

大江は1990年代に実生活でサイードと親しくなり、彼の著作『オリエンタリズム』(1979年)と『始まりの現象——意図と方法』(1985年)に賛辞を寄せていた。二人が初めて顔を合わせたのは、1990年にカリフォルニア大学サンディエゴ校で行われた学会だった。1994年に大江がノーベル文学賞を受賞した後、頻繁にニューヨークに行くようになると、二人は一緒に過ごして親交を深めた[19]。2002年に二人の行った往復書簡は朝日新聞に掲載された。その書簡中では、サイードの『文化と帝国主義』(1993年)を引き合いに出して、日本の湾岸戦争への関与が批判されていた。『水死』の作中で古義人は、2003年に白血病で死んだサイードからの贈り物が彼の死後に届いたのを受け取る。それは楽譜の冊子の裏表紙に書かれた直筆の手紙で、才能溢れるピアニストでもあったサイードは、なんと書き込みを入れる直前までその楽譜を弾いていたのだ。その楽譜にアカリが落書きのような書き込みを入れると、父親はアカリをバカと呼んで、謝るのを拒否する。これはアイロニーである。『水死』に描かれた和解に納得できないという井上の非難に対して、大江はサイードとの対話を行いながら次作によって応答しようとしている。だが、大江はこの時点で、サイードとの知識人同士の関係を、息子とのケア志向の関係よりも優先しており、この姿勢がそもそもそもそも仲たがいを引き起こした原因だったのである。

大江の「自作リライト」というトピックについて時渝軒が述べているように、1980年代以降の大江の小説のほとんどは、それ以前の作品の引用、参照、書き直しを特徴とする。時は大江自身の言葉を使って、これらの小説を「晩年の様式」と「最後の小説」という二つのタイプに分類する。「晩年の様式」とは、自己の統合や達成を遅らせて、完成しないことを目標にする小説のタイプであり、「最後の小説」とは、以前の作品を完成させて統合しようとする小説のタイプで、一種の結論としての役割を果たす[20]。『水死』は「最後の小説」タイプの作品で、大江の1972年の小説『みずから我が涙をぬぐいたまう日』を貫く、父の死の謎をめぐるナラティヴを参照しつつ、その謎を解く。こうして『水死』は、平和活動家の息子でもなく天皇崇拝者の父でもないアカリという

18
Edward Said, *On Late Style*, New York: Vintage, 2006, p.31.〔エドワード・W・サイード『晩年のスタイル』、大橋洋一訳、岩波書店、2007年、36ページ。筆者が引用した英語文献の日本語訳については、〔　〕内に文献情報を付記し対応箇所のページ数を示すが、対応箇所の訳文の直接引用は行わない。以下同様。訳者補足。〕

19
大江『読む人間』、217ページ。

20
時渝軒「1980年代以降の大江健三郎小説における自作リライトの手法」、『大江健三郎全小説』第十一巻、講談社、705ページ。

人物を周縁(マージナライズ)に押しやる。とはいえ、たとえ『水死』後の大江の第一作目の小説が「非総合的」な「晩年の様式」タイプだったとしても、以前に扱った題材を引用したり、参照したり、書き直したりすることが新しいものを生み出すようには思われない。だが、ニューロダイバーシティがすでに新しいものだったとしたら、どうだろうか。それが左翼と右翼の二項対立に還元不可能な、いわば第三の周縁(マージン)だったとしたら。リュス・イリガライの言い方を借りれば、これを「ひとつではないこの周縁(マージン)」と呼んでもいいかもしれない[21]。もし古義人とアカリの間の和解の不在についての井上の洞察を引き継いで、それをニューロダイバーシティについての彼の直感と結びつけるなら、『水死』という作品がそれ自体ですでに愛する行為なのだと読むことができるだろうか。

フクシマ以後、大江は光の行く末に絶望を感じている。件の出来事が言語の脆弱さをさらけ出している、と彼には思われるからだ。もし憲法第九条により強い力があれば、福島の原発事故による災害は決して起こらなかっただろう、と彼は推論する。大江が考えるに、戦後憲法は、過去に第二次世界大戦で侵略を行ったことを認め、未来に同じことを繰り返さないようにするという誓いを力の源にしていた。フクシマはこの憲法に決定的な打撃を与えている。なぜならそれは、上の二つの誓いが両方とも果たされていないことの表れだからだ。2011年9月の「さようなら原発」集会での講演で、大江は次のような問いを投げかけている。「これは、あの大きい被害体験、また加害体験に根ざして、新しい国、新しい国びとの生きてゆき方を決めた決意をすっかりムダにした、ということではないか？」[22] 公的な発言には珍しい、彼の堂々巡りの思考は、近代日本の歴史を突き動かす対立物の相互肯定についての柄谷の主張を裏づける。大江は次のように話を締めくくる。「広島・長崎で始まったものが、福島の原発事故で終わったということではないか？」[23] 大江が光の未来を考える時、彼に「大きな、真っ暗な壁」を突きつけるのは、戦後民主主義の終焉という亡霊である。大江は戦前の暴力、戦前のファシズム、戦前の外国人嫌悪の再来を危惧しつつ――だが戦前の優性思想については一言も触れず――、障害を持つ息子は到底生きていけないだろう、と考えている。しかし、『水死』で私たちが目の当たりにするのは、アカリが父親の言語と全く異なる言語を用いて、自分自身の「光の道」を開いていく姿である。

21
これは、イリガライの1977年の著書『ひとつではない女の性』にちなんだ呼称である。このタイトルは、イリガライが「性的差異」と呼ぶものを言い表しているが、この性的差異においては「男性」と「女性」が二項対立として定義される。そしてこの二項対立は、現実の差異を認めるのではなく、男性性とその反対物を認めるだけである。二項対立の二極は「ひとつ」を構成するが、現実の女性の差異は「ひとつではない」。

22
大江健三郎「「さようなら原発」のラリーに加わる」、鎌田慧編『さようなら原発』、岩波ブックレットNo.824、岩波書店、2011年、19ページ。

23
前掲、19ページ。

アカリの余白(マージナリア)への書き込み――感覚の実践(プラクティス)としてのスティミング

『水死』での父と息子の「衝突」は、病院の待合コーナーで起こる。父・古義人は四十年以上ずっと、赤革のトランクの中にある手紙や切り抜き記事、ノートや日記を見るのを、今か今かと待ち焦がれている。トランクは彼の父親の

もので、父親の死後はそれを開けるのを母親が禁じていた。母親が死んだ今、このトランクの中身こそ、1945年の日本の降伏直前の数ヶ月間に自分の父親が天皇信奉者たちと徒党を組んで何をしていたのかを明らかにしてくれる、と古義人は確信している。アカリと仲たがいした日、古義人はトランクから取り出した三冊の本を携えて、四国から帰ってきたばかりである。彼が手にしているのは、ジェームズ・ジョージ・フレイザーによる神話と宗教の比較研究、『金枝篇』（1890年）である。これは、1940年代の初めに古義人の父親が隣の県に住む天皇崇拝者の師匠から借りたもので、英語の三巻本には二人の書き込みがびっしりと入っている。再生を伴う王殺しに関するフレーザーの理論についての二人の所見を紐解くために、古義人は二人のそれぞれが入れた余白への書き込みを読み耽る。そうこうしているうちに、同じ日にアメリカから別の三巻本が届く。エドワード・サイードの私物であった、ベートーヴェンのピアノソナタ第一番、作品二、第一楽章－第三楽章〔「ハイドンに捧げられた三つのソナタ」〕の楽譜である。三冊綴の特装本は、一目で彼の筆跡とわかるサイードの「鉛筆書き」でいっぱいである[24]。古義人が言うには、サイードは古義人の義弟の自殺を知った時に第二楽章を弾いていて、楽譜の裏表紙にその死を悼む言葉を書きつけた。それが当時ファックスで送られて、数年後の今、原物が郵送で届いたというわけである。

「余白への書き込み」が古義人を亡き父親、師匠、知識人の友人に結びつける役割を果たしていることを、この場面は明らかにしてくれる。こうした人々の愛したテクストの中に直筆で書き込まれたノートは、彼らの魂に通じる窓として夢想されている。だが、場面が先に進むにつれて、古義人が息子アカリのニューロダイバーシティを故意に思い出さないようにしていることも明らかになる。ここで、アカリのニューロダイバーシティは、別種の余白への書き込みという形をとっているのだ。この小説を読んでいると、アカリが「力を入れない鉛筆書きで幾つかの小節を囲ったり」して、楽しげに楽譜に書き込みをする場面が出てくる。古義人はこれらの余白への書き込みを、「私には意図がよくわからぬもの」と呼び[25]、ベートーヴェンの二冊目の楽譜と芯の柔らかい鉛筆をアカリに渡して、自分は待合コーナーで『金枝篇』に注意を向ける。近くにいた患者がアカリにボールペンを貸してくれて（「アカリさんは、目が少し御不自由でしょう？」）、アカリがサイードの楽譜にK五五〇と書くと、古義人は障害を侮辱するような暴言を投げつけてしまう。「きみは、バカだ」[26]。彼が息子にこんなことを言ったのは初めてである。帰宅したアカリが、ベートーヴェンとモーツァルトの交響曲第四十番ト短調K五五〇を聴き比べようとしてステレオのボリュームを上げる時にも、古義人はまた同じ暴言を吐いてしまう。古義人は、モーツァルトの交響曲にベートーヴェンと「同じメロディー」があるのに気づいている[27]。そして、アカリが二つの曲の

24
大江健三郎『水死』、講談社文庫お2-21、講談社、2012年、183ページ。Kenzaburō Ōe, *Death by Water*, translated by Deborah Boliver Boehm, New York: Grove Press, 2005, p.140.

25
前掲、183ページ。Ibid., p.140.

26
前掲、186ページ。Ibid., p.143.

27
前掲、190ページ。Ibid., p.146.

主題の重なりを自分に教えようとしているのを知っている。だが、古義人は赤革のトランクのことで気が動転してしまっている。フレイザーの三巻本を除いて、トランクの中身のほとんどが処分されてしまったことがわかったのだ。古義人は四十年間ずっと、父親についての小説の決定版を書くのを心待ちにしてきたのに、もうその夢はあきらめざるをえなくなった。

有名なNHKのドキュメンタリーからもわかるように、現実の光は十代の初めから作曲を始めた。光の教師・田村久美子によれば、光のピアノはほとんど上達しなかったが、「楽譜に書き取るゲーム」は大好きだったということだ。録音された音楽を聴いて五線紙に書き出すのがなぜ楽しかったのかは語られていない。私たちにわかるのは、彼が取り憑かれたようになって、家中のクラシック音楽のアルバムのコレクションを聴きまくり、それを次々に楽譜に書き留めていったということだけである。田村曰く、ほどなくして光の写譜には、田村の知らない音楽、「本当の創作」[28]が含まれるようになった。ここで、ドキュメンタリーに次のようなナレーションが入る。「今まで、光さんの心の中に閉じ込められていたものが、音楽という形で、一気にほとばしり出たのです」[29]。

しかし、『水死』の前述の場面に見られるのは、自己表現の発露というよりも、外界と関わりそれを秩序づけるプロセスとして機能するような音楽的感性である。古義人自身が説明しているように、音楽を聴いて自分の音楽を作るプロセスを「軸に、(中略)アカリの生活は進行してきた」[30]。アカリは、クラシック音楽への造詣とこの種の音楽を反復し書き留める能力を、自分の生活環境を「調節」するのに使っている[31]。とりわけ、押しつぶされそうな圧力を感じる時や、待合コーナーでの三時間のように単に退屈な時はなおさらである。古義人は医者の診療室で、サイードがベートーヴェンのソナタ第一番作品二第二楽章をどんな気持ちで弾いたのかを話したがっている。だが、その前にもうアカリは、古義人に「モーツァルトのK五五〇と同じですからね」[32]と言って、楽譜のへりを叩いている。「そのままかれは内面に湧き起こる音楽の速度で譜面を追って行き、(中略)その終りまでくるとまた一楽章から繰り返して読んでいた」[33]。

M・レミ・ヤーゴウはその著書『自閉症を書き記す――修辞的・神経学的なクィア性について』(2017年)で、自閉症に特徴的な行動習慣(プラクティス)は「発明的な場」として理解可能だと論じている[34]。ヤーゴウは特に三つの行動習慣に焦点を当てる。一つ目は固執、つまり、強迫的な、かつ/または選り好みの強いこだわりの習慣化である。二つ目は反響症状(エコフェノメナ)であり、これは反響言語(エコラリア)(言葉やフレーズの反復)、反響表情(エコミミア)(顔の表情の反復)、反響書字(エコグラフィア)(書かれた言葉の反復)を含む。三つ目は、自己刺激行動もしくは「スティミング」であり、これには、体を揺らしたり、腕をばたつかせたり、指打ちをしたりといった行動が含ま

28
NHK『響きあう父と子――大江健三郎と息子光の30年』(59分のドキュメンタリー)、NHKスペシャル、1994年、24:50。www.youtube.com/watch?v=EfiMZht-yiE

29
前掲、25:23。

30
大江『水死』、267ページ。Ōe, *Death by Water*, p.207.

31
前掲、268ページ。Ibid., p.209.

32
前掲、184ページ。Ibid., p.141.

33
前掲、185ページ。Ibid., p.142.

34
M. Remi Yergeau, *Authoring Autism: On Rhetoric and Neurological Queerness*, Durham, NC: Duke University Press, 2017, p.34.

れることもある。ヤーゴウはこれらの行動習慣を「発明的」と呼ぶ。それらが自閉症者を孤立させる非随意的なものだと見なす伝統的な学問とは違って、ニック・ウォーカー、ジェイソン・ノーラン、またヤーゴウ自身のような理論家の手になるオートエスノグラフィーや「自閉症者のテクスト（オーティステクスト）」[35]は、こうした行動習慣を、具体化したコミュニケーションと見なす傾向を次第に強めているからだ。こうした行動習慣は、沈静化の作用と刺激の作用を繰り返し、自閉症の人々を、彼らが聴覚や触覚で感じ取る環境へと結びつける。このようにして維持される複雑な感覚的関係は、模範的な発達の時系列に沿って生きる人々の手で、因襲的な社会知識に置き換えられてしまって久しい。ジェイソン・ノーランとメラニー・マクブライドは、こうした感覚的関係が定型発達の人々の認識や理解の範囲を超えて意味作用を伝達する様子を視野に入れた上で、この関係を「自閉症の記号論」[36]と呼ぶ。

ジャーナリストであるリンゼイ・キャメロンの1998年の著書『光の音楽——大江光と健三郎の類まれなる物語』を読めば、現実の光がサヴァン症候群の音楽の達人であるだけでなく、自閉症でもあるということがわかる[37]。この手の裏づけがなくとも、『水死』の前述の場面から、架空の人物アカリに自閉症的な傾向があることは明らかである。彼が音楽を聴いたり楽譜を読み込んだりして長時間集中できるのは、固執による過集中のためであるように思われる。こうした作業が音楽のパターン認識と心の中での音楽の再生という形をとるのは、彼なりの反響動作の形態のように思われる。彼が楽しそうに手書きで五線紙を埋め尽くし、書き写した音楽に合わせて薄く円を描くのは、スティミングであるように思われる。古義人は明らかに、こうしたことすべてをわかっている。それは彼の一人称のナレーションから伺える。後日、息子とまだ仲直りしていないにもかかわらず、彼は次のように言って嘆く。

> いま私の家から、クラシック音楽が消滅している。アカリはなおFM週刊誌のクラシック番組をチェックしているし（月刊音楽誌の巻末の放送プログラムに発見される作曲家の名、作品名のミスプリントを訂正する日課も変らない）、CDの棚を、頭のなかで進化発展するのらしい構造図にしたがって並べ替える姿も、相変らずだ。しかし、この半年、アカリがクラシック音楽の実際の音で空間を満たす、ということはない[38]。

アカリがクラシック音楽を控えているのは、それが二人を結びつける言語だからだ、と古義人は考えている。だが実際には、アカリは自分のセルフケアの儀式を誤解されたくないし、自分個人の記号論を蔑まれたくもないからそうしているのだ、と読者には感じ取れる。アカリが丹念にミスプリントを訂正し、いつ終わるともなく自分のCDを並べ直す姿を古義人は見ている。古義人なら、こうした行動がアカリ自身を落ち着かせるためのものだと察知

35
Ibid., p. 193.

36
Jason Nolan and Melanie McBride, “Embodied Semiosis: Autistic ‘Stimming’ as Sensory Praxis,” *International Handbook of* Semiotics, edited by P. P. Trifonas, 2015, p. 1070.

37
Lindsley Cameron, *The Music of Light: The Extraordinary Story of Hikari and Kenzaburō Ōe*, New York: Free Press, 1998, pp. 22, 54, 72.

38
大江『水死』、267–268ページ。
Ōe, *Death by Water*, p. 208.

することさえできるかもしれない。だが、固執とスティミングが、事物とアカリ自身の間の、またアカリの行動と彼の周りの人々の間のコミュニケーションが具体化した形態だということは、古義人には見抜けない。この小説に表れているのは、アカリの強迫観念に対して細心の注意を払わなければ、という彼自身の強迫観念にがんじがらめになった古義人の姿である。

まるでニューロダイバーシティ運動の中心的なアイデアの一つを裏づけるかのように、待合コーナーの場面は古義人を揶揄して終わる。自閉症の作家メル・バッグズは、『私の言語で』と題された有名なビデオで、「自分の環境の持つすべての様相との絶えざる会話」の中に身を置くとはどんなことかを、まず実演してみせ、それからコミュニケーションデバイスを使って翻訳する[39]。バッグズは家中のいくつもの部屋で、歌い、手をばたつかせ、物をくるくる回したり水を跳ね散らしたりしながら、自分の「母語」には、「人が解釈しなければならないような、意図が込められた言葉、ひいては視覚的な象徴さえ」ないと説明する[40]。そこにあるのはむしろ、物の匂いを嗅ぎ、味を味わい、物を見つめ、感じる行為であり、そうしてこれらの相互作用が、ヤーゴウが「スティム・ポイント」[41]と呼ぶものに変容される。ビデオから引用されることが最も多いバッグズの台詞は、次のような問いかけである。「あなたの言語をうまく学べないことが欠陥と見なされるのに、私の言語をうまく学べないことが自然だと見なされ、しかも、そのせいで私のような人々が、不可解だとかわけがわからないとか言われるのが大手を振ってまかり通る」のはなぜなのでしょうか[42]。古義人に対する揶揄は、この問いの一変形である。

父と息子のいさかいの後、妻と娘が一緒になって古義人の愛情の薄さを言い立てる。彼に和解を切り出す勇気がないのは、「真暗な心でアレコレ考え」るのにかまけすぎているからだ、と二人は言う[43]。赤革のトランクがほとんど空だと知った途端、彼の言うところの「大眩暈」に襲われた古義人は、また別の眩暈が起こって自分を妻と娘の批判から解放してくれればいいのに、と願う。うまい具合にこの眩暈が襲ってきてくれれば、それを盾に取って、「周縁性（マージナリティ）」について知るべきことはすべて理解しているのだと自分に言い聞かせられるのに。古義人は自分の部屋に逃げ込んで本に慰めを求めるが、おぼつかない指の横に、文庫本のページの活字で埋まった長方形と周りの白い部分があるのが目に入る。これが彼に「marginalia」という英単語を思い出させる[44]。何年も前に、「周縁性（マージナリティ）」を作品のテーマにした建築家や文化人類学者や作曲家の友人たちと集まって、「marginalia」について話した様子が記憶に蘇ってくる。

察するに、ここに出てくる古義人の友人たちとは、磯崎新（1931–2022年）、山口昌男（1931–2013年）、武満徹（1930–1996年）のことである。1980年代と1990年代に、大江は彼らと一緒に季刊誌『へるめす』の編集に当たった。

39
Mel Baggs, *In My Language*, Video. YouTube, January 14, 2007, 3:43. www.youtube.com/watch?v=JnylM-1hI2jc

40
Ibid., 3:37.

41
Yergeau, *Authoring Autism*, p. 178.

42
Baggs, *In My Language*, 6:34.

43
大江『水死』、192ページ。Ōe, *Death by Water*, p. 148.

44
前掲、197ページ。Ibid., 152.

三人のうち、文化人類学者の山口昌男は、中心と周縁を論じた著作で特に有名である。1996年デューク大学での講演の際に、大江は山口が革命的ではないという非難から彼を弁護した。大江曰く、「口さがない人々は、周縁を活性化することは、より強固な中心的権威を確立するためにしか機能しないとまくし立てました。（中略）ですが、そんなことはありません」[45]。このエピソードの結末が笑いを誘い自己反省を促すのは、それがまさに正反対の主張を証明しているからである。古義人はアカリの余白（マージナリア）への書き込みを理解できないのだ。古義人が興味を持っているのは、二人の極右の天皇主義者、つまり彼の父とその師匠がフレーザーの本の余白に入れた書き込みであり、人権と脱植民地化を擁護するパレスチナ人の左翼理論家がベートーヴェンの楽譜の余白に入れた書き込みである[46]。柄谷の定式によれば、古義人は極右と極左、中心と周縁のいずれか一方を他方によって支持しながら、二極の間をぐるぐると回っているのだ。現在、自分の強迫観念のせいで息子の言語を身につけるのが不可能だと悟った古義人は、『ヘルメス』の仲間たちと過ごした過去を追憶する。それは彼にとって、「自分の人生でいちばん創造的な環境のなかにあった時期」だった[47]。だが、アカリの「環境」は、ただ古義人がそこに関わることができるだけで、はるかに創造的で独創的なものになるだろう、ということが読者には見て取れる。

45
Kenzaburō Ōe, “Japan’s Dual Identity: A Writer’s Dilemma,” *World Literature Today* 62, no. 3 (Summer, 1988): 366.

46
『水死』に表れたジェームズ・ジョージ・フレイザーの『金枝篇』（1890年）への関心は、おそらく山口に負うところが大きいであろう。山口は多くの著作中で『金枝篇』に言及していた。Ryuta Imafuku, “Masao Yamaguchi: A Hermes-Harlequin in the Field of Semiotics,” *The Semiotic Web* 1987, edited by Thomas Seboek and Jean Umiker-Sebeok, Berlin: De Gruyter, 1988, p. 101. DOI: 10.1515/9783110868388

47
大江『水死』、197ページ。Ōe, *Death by Water*, p. 152.

千樫と真木——ニューロダイバーシティの擁護者たち

『水死』は、神経学的に多様（ニューロダイバース）な息子の父親としての古義人の限界を茶化してみせる一方で、アカリにとっての広い意味での家族とコミュニティが提供するケアを、愛情に溢れた形で描き出してもいる。ニューロダイバーシティのパラダイムに対する主な批判の一つは、それが自閉症を障害としてではなく差異や文化的アイデンティティとしてとらえているという点に向けられている[48]。学者やニューロダイバーシティの擁護者たちは即座に、それは誤解だと指摘している。アイヤナ・ベイリンは次のように書いている。「自閉症を病理化しないということは、自閉症の人々に障害がないふりをするということではありません」[49]。ニューロダイバーシティ運動は、障害の「医学的」モデルと「社会的」モデルの間の区別を受け継いでいる。「医学的」モデルは、障害とは個人の生まれつきの性質であって、治療やケアを必要とするものだと見なす。「社会的」モデルは、障害を社会的な文脈の機能——個人の障害と社会による支援や期待の間の相性の良し悪し——と見なす。ニューロダイバーシティのパラダイムは、医学的モデルよりもむしろ社会的モデルを採用しており、ケア労働と公共政策が障害の軽減に重要な役割を果たすことを認めている。

48
Jacqueline den Houting, “Neurodiversity: An Insider’s Perspective,” *Autism* 23, no. 2 (2019): 271. DOI: 10.1177/1362361318820762

49
Ayana Bailin, “Clearing Up Some Misconceptions about Neurodiversity,” *Scientific American Blog* (June 6, 2019). https://blogs.scientificamerican.com/observations/clearing-up-some-misconceptions-about-neurodiversity/

だが、前に論じたように、「自閉症の記号論」の理論化は文化構築主義の域を超えてもいる。この記号論は、社会のルールではなく、おのずと繰り広げられる感覚の戦略から意味を引き出すのである。

このことの一番の理解者は、アカリの妹・真木と母・千樫である。彼女たちはこの小説に直接には登場せず、古義人の妹アサの手紙に出てくるだけである。そして、アサが彼女たちとの会話を兄に伝える。このように、この小説では真木と千樫の洞察は周縁的（マージナル）な地位に置かれているものの、その一方で、彼女たちの卓越性が強調されてもいる。千樫は、アカリが音楽に関して発揮する自律性という話題に関してはとりわけ饒舌である。古義人と仲たがいした後、アカリは父がいる時に音楽を聴くのも、作曲をするのもやめてしまう。過去に古義人とアカリが口論した時、アカリにCDを買うという古義人のやり口が、うわべだけであるにとどまらず、押し付けがましいものだ、とアカリの母は言う。「自分が選んでかけるのじゃない音楽が、これまでアカリを支えてきた音楽とは正反対の……（中略）……奇怪なものに響いたとしたら、と恐れる気持ちがあって……」[50]。千樫は「奇怪」という言葉で、アカリに聞こえる音の世界が彼に及ぼす力を強調し、彼がその世界をうまく渡っていく自分なりのやり方を見つけることの重要性を強調している。「音楽を聴く自由が守られなければならないように、音楽を聴かない自由も守られなければならない」[51]。

ここで千樫は、主流派の心理学による二通りの自閉症理解に対して、ニューロダイバーシティ運動が突きつける反論を繰り返していると言えるだろう。その二通りの理解の一つ目は、自閉症の人々が「つながりを絶って閉じた」状態にあるという考えである。英語の場合、この考えは、自分自身に注意が集中した状態を意味する「autism」という言葉の中に見て取れる。日本語の場合も同様に明白である。「自閉症」という言葉は、「自分自身の中に閉じこもる病気」を意味する。これとは対照的に、アカリは音に対して自分の心を開いており、そのせいで、彼なりのやり方にとって得るものが何もないのに音を聴くのを無理強いするのは危険だ、と千樫は知っている。彼女は、アカリが「つながりを絶って閉じた」のとは反対の状態にあることを知っているのだ。主流派の心理学による二つ目の理解は、自閉症の人々にとっての最良のセラピーとは普通になることだ、という考えである。この種のセラピーは、ABA——Applied Behavioral Analysis 応用行動分析——という頭字語で知られており、工業国ではこれが、「自閉症の身内がいる家族に提供される「治療」様式のうちで優勢を占める」[52]。「言語能力やコミュニケーション能力を増大し、注意力を向上させ、問題行動を減少させる」というのがABAの謳い文句だが、その施行に際しては、自閉症は本人の自由意志の行使を妨げるものだから、行動に対するコーチングが必要だ、というのが大前提になっている[53]。

50
大江『水死』、262ページ。Ōe, *Death by Water*, p.204.

51
前掲、264ページ。Ibid., p.205.

52
Alicia Broderick and Ali Ne'eman, "Autism as Metaphor: Narrative and Counter-Narrative," *International Journal of Inclusive Education* 12, no. 5–6 (2008): 474. DOI: 10.1080/13603110802377490

53
Autism Speaks, "Applied Behavior Analysis (ABA)", 2021. www.autismspeaks.org/applied-behavior-analysis

千樫ならこんな治療には猛反対するだろう。彼女はアカリの「自分の力の働き」を引き合いに出して、「問題行動」をしているのはアカリではなく古義人だと言う。古義人がアカリの力の働きを尊重しないのは、「あの人の抑圧」だ、と[54]。

アカリの妹・真木は、スティミングという話題に関しては、母に負けず劣らず洞察力がある。医者の診療室で古義人がアカリをバカと呼ぶと、アカリは少し間を置いてから、「両腕を頭に強く廻し、その両腕をバタバタやっ」て応える[55]。このイメージは、中学で定型発達の生徒がアカリを中傷した日についての古義人の話を思い起こさせる。家に帰った真木が、アカリの受けた中傷を両親に話して聞かせている時、兄は同じ部屋でクラシック音楽を聴いている。そしてこの時も、彼は腕をバタバタさせる。アカリは「妹の音声を遮るために（しかし音楽は聴き続けたい）両肱を突き出した恰好で耳にあてた両掌を、なんとか調整している」[56]のだ、と古義人は想像する。どうやって「なんとか調整している」のか、父親は理解していない。だが、妹は違う。「音楽を受容する脳の働きは、言葉を話す・聞くそれとは別だ」、と彼女は言ってのける[57]。アカリはヘイトスピーチの力と感情に背を向けて、音楽と自分自身の身体に波長を合わせる。彼は自分の腕を使ってスティミングを行うことで、自分を苦しめる者たちには理解できない音とリズムの方に心身を向け、緩衝空間を作り出す。音楽がそれだけで彼を和ませたり守ったりしてくれるわけではない。むしろ、千樫の言うように、音楽と共鳴して自分自身の力を音の世界の力に同調させる方法を見つけることが助けになるのだ。これがアカリのセルフケアである。これは、ヤーゴウが『自閉症を書き記す』で提起している次のような主張の実証となる。「具体化したコミュニケーション形態——反響動作やチックやスティミングを含む——が自閉症の人々にとってのさまざまな可能性を提示してくれる」[58]。主流のセラピーは、コミュニケーションを増やして注意力を向上させるという謳い文句を掲げるかもしれない。だが、アカリのスティミングはそれ固有の独創的なやり方で、すでにこうしたことを成し遂げているように見受けられる。

54
大江『水死』、263ページ。Ōe, *Death by Water*, p.204.

55
前掲、186ページ。Ibid., p.143.

56
前掲、268ページ。Ibid., p.209.

57
前掲、368ページ。Ibid., p.289.

58
Yergeau, *Authoring Autism*, p. 181.

リッチャンとウナイコ——「便所からの解放」としてのケア労働

締めくくりとして、さらに二人の女性登場人物、ウナイコとリッチャンを考察しよう。『水死』に千樫と真木が直接登場しない理由の一つは、彼女たちが東京にいて、古義人とアカリは四国の森の中にある先祖代々の家を修理しているからである。この「森の家」で、古義人は彼と息子に心を寄せる（ケア・フォー）人々を集めたもう一つのコミュニティを作る。そこには、劇団「穴居人（ザ・ケイヴ・マン）」のメンバーや、

古義人の父の元弟子・大黄(だいおう)が含まれる。全体として、このコミュニティは、古義人に心(ケア・フォー)を寄せる人々の集まりで、その思いやりから、極右と極左というせめぎ合う両極へと彼がのめり込むのを諌め、そしておそらくはこの両極の間の葛藤を解決する。そうこうしているうちに、古義人とアカリの間の「和解」が成立するが、それを成し遂げたのは古義人ではなく、リッチャンという名前の劇団員で、彼女がアカリが元通りに作曲を再開する手助けをする。リッチャンは、当初劇団の陰の立役者であるウナイコの秘書をしていたが、『水死』のクライマックスで、アカリの専従の介護者(ケアギバー)になる決心をする。ここで私は、彼女のこの決心とウナイコとの関係をどう読み解くかが、この小説全体をどう読み解くかを規定する、という主張を提起したい。

ウナイコは、政治的・歴史的な事柄との関わりで寓意的な役割を果たす。彼女は三十代半ばの美しい女性で、革新的な芝居を書くことで世の不正と暴力に打ち勝つという志を持っている。彼女は「森の家」を拠点として、自ら発明した方法で上演する演劇に中高校生を出演させ、お互いにやりとりする中で、彼らが政治問題に関心(ケア・アバウト)を持つよう促し、賛否の投票を行わせる。こうして見ると、彼女の作劇法は、フクシマ以後の大江の講演を出版した岩波ブックレットシリーズと同じ目的を持っていると言えるだろう。彼女は、「明確な主張を端的に伝え、〔現代人が当面する課題の〕解決のための見通しを読者と共に持ち」たいと思っているのだ[59]。ウナイコは、漱石の『こころ』における殉死に問いを投げかける作品の製作で成功を収めた後、彼女自身の伯父の犯した罪を議論の俎上に載せるような芝居を書く。伯父は文部省の高官だが、ウナイコが十代だった頃、彼女を強姦して妊娠させ、無理やり中絶させた上に沈黙を強要した。伯父と地元の教育委員会の彼の支持者たちが、上演をやめないと訴えると言って押しかける頃には、ウナイコは既に、賛否両論の渦巻く極めて多くの政治論争が錯綜する中に身を置いている。

その筆頭が「慰安婦」問題である。米山リサが書いているように、第二次世界大戦中に日本がアジア人女性を性奴隷にしたという問題は右翼の主たる攻撃目標となった。それは、1990年代半ばに右翼が「新しい歴史教科書を作る会」のような団体をいくつも作り、国会議員や文部省と結託して、この問題を教育カリキュラムから抹消しようとした時期のことであった。2006年、より「愛国的な」性格を強め、民主主義の理念を希薄にする形で、教育基本法が改正され、右翼は大勝利を収めた。この潮流に、ウナイコは、学校を舞台にした彼女の革新的な作劇法で否を突きつける。寓意という観点から見れば、彼女は慰安婦を象徴する登場人物である。彼女は過去に強姦され沈黙を強いられただけでなく、自分にそのような苦しみを与えた人間を、現在裁きの場に引きずり出すことを求めているからだ。2001年、「日本軍性奴隷制を裁く女性国際戦犯法廷」が東京で開催され、裁判での審議を録画して放映するという

59
「「岩波ブックレット」刊行の言葉」、岩波書店、1982年4月。〔前掲の二つの岩波ブックレットを含め、すべての岩波ブックレットの裏表紙裏に記載。訳者補足。〕

契約がNHKとの間に結ばれた。しかし、六四人の元「慰安婦」の証言の後、NHKは政治的圧力に屈し、核心部分の映像をカットした[60]。ウナイコはNHKと共同作業をしているわけではない。しかし、彼女の伯父が上演をやめさせようとする芝居は、古義人の妹アサと他の地元女性たちが何十年も前に製作しようとして、協力者のはずのNHKの検閲の餌食となった映画に含まれていた要素をいくつも反復している。『水死』では、NHKを狼狽させたのは集団強姦の場面で、その被害者となる登場人物を今まさにウナイコが演じようとしている。そして、当時介入した地元の「右派」が、彼女の伯父を東京から呼び寄せている[61]。

こうして『水死』は、小森陽一が「衝撃的な結末」[62]と読んだ地点へと至る。ここで、完成と統合を目標とする「最後の小説」に向けた自作の改稿と、完成も逃亡も目標としない「晩年の様式」によるリライトという、時渝軒の提唱する大江の二つのスタイルの間の区別を思い出そう。さらに、『万延元年のフットボール』のような小説に対する柄谷の賞賛を思い出そう。この小説は、近代日本の政治的な対立党派が相互に定義し合い支え合っているという理由で、歴史上の解決は誤謬にすぎないと主張する。もし『水死』のセンセーショナルなエンディングが一つの解決だとすれば、おそらく柄谷はそれを好意的には評価しないだろう。しかし、この小説の結末で興味津々なのは、それがフェミニズムの勝利を演出しようと試みてはいても、「表象のシステムそのものを可能にしている「穴」」もしくはアポリアを、このシステムが常に必要とする[63]、という柄谷の主張をはからずも証明する結果に終わっているという点である。

以下、この小説のエンディングがどうなるかを見ていこう。そこでは、古義人の父親の弟子・大黄が中心的な役割を演じる。大黄は大江の以前の小説に登場したことがあり、「森の家」のそばで、軍隊のような訓練を行う右翼の錬成道場を経営している[64]。『水死』を読むと、大黄が十代の頃に古義人の父親が大黄を引き取って、「朝鮮か中国」から日本に連れ帰ったのだということがわかる[65]。大黄は孤児で、両親が日本人だったのかどうかもわからない。朴裕河（パク・ユハ）が書いているように、大黄は、「日本に帰っても居場所を得られなかった引場者の多かった中で、そして「戦後日本」に対して常に違和感を持って生きながらも右派となっていった引揚者の一人」[66]だというふうにも読める。それならば、大黄が当初は、「森の家」の面倒見のいい世話人（ケアテイカー）として、アカリの身体にセラピーを施したり、古義人との過去をありありと語ったりしていたのに、態度を豹変させて、自分の古い道場にウナイコを人質にとって彼女の伯父と「交渉」しようとするのも、驚くには当たらない。しかし、またしてもウナイコを性的暴行した伯父が大黄に銃殺され、さらには、古義人の父親が溺死したのと同じ雨の夜に大黄自身が自殺するというのは、驚きの展開である。

60
Lisa Yoneyama, *Cold War Ruins: Transpacific Critique of American Justice and Japanese War Crimes*, Durham, NY: Duke University Press, 2016, pp. 121–129.

61
大江『水死』、440ページ。Ōe, *Death by Water*, p. 349.

62
小森陽一「拮抗する言葉の力——大江健三郎『水死』を読む」、『世界』第803号、2010年4月、岩波書店、217ページ。

63
柄谷『歴史と反復』、6ページ。Karatani, *History and Repetition*, p. 3.

64
大江の『「おかしな二人組」三部作』はすべて、古義人、千樫、アカリを中心にした小説だが、その第一作目『取り替え子——チェンジリング』（2000年）で大黄は死んでいる。『水死』に出てくる大黄は、その時の死は、彼の弟子が古義人へのいたずらとして仕組んだフェイクだったと言う。

65
大江『水死』、518ページ。Ōe, *Death by Water*, p. 414.

66
朴裕河「『水死』—— 新しい共同体のために」、『大江健三郎全小説』第四巻、講談社、618ページ。

大黄の死によって、小説の冒頭から伏線を張られてきた暗喩――「森に上らせる」[67]――がやっと腑に落ちるものになる。これは四国の古義人の家では、「生まれ故郷の奥深くに帰っていく」という意味で「死ぬ」ということなのだ。古義人は、天皇の神格放棄の後に父親が溺死したのは「殉死」だったのではないかと危惧していたが、「森に上がらせる」の意味する死は、「殉死」よりも有機的な色合いが濃く、国家主義的な色合いが薄い。『水死』の最後で大黄が自殺する時、彼が自分自身を今まさに「森に上がらせ」ているというだけでなく、古義人の父親も同じことをしたのだ、と古義人は確信する。かくして、大江の『みずから我が涙をぬぐいたまう日』の中心にあった緊張は、『水死』で解決される。朴裕河が論じているように、この小説では、十九世紀以来日本の政治を突き動かしてきた対立に、新たな政治的な連帯（「新しい共同体」）が取って代わる。「大黄は「国家」や「民族」のかかげる理念から自由な「谷間の森」を選択し」ているのだ、と朴は書いている。そして、「それは、（中略）命をかけられるほどの「関係」を探ったことであり、同時に「他所者」の帰郷を受け入れる共同体を夢想してのことだったはずである」[68]。

この読解には強い説得力がある。にもかかわらず、このような読解は受け入れがたいと感じる読者もいるかもしれない。問題は、伯父によるウナイコの性的暴行であり、大黄が伯父を射殺したのはまさにその夜である。同じ日の昼間、ウナイコが十七歳の時に起こったことについて、彼女と伯父が口論している時、彼女は強姦されたのだと言って断固として譲らない。「強姦です。（中略）わたしを強姦したんです。」と彼女は言う。「やられた証拠」があるのだ、と[69]。だからこそ、「わたしは今夜もう一度、伯父がその物の怪を、つまり十七歳の娘を確かめに戻って来るんじゃないかと思いますよ！」[70]という、ウナイコの能天気な期待に読者は困惑する。同様に、隣室から様子を伺っていたリッチャンの言い分からも、不穏なものが感じられる。

> 争っている音声というのではなかった。時に二人の身体の揉み合う気配があり、すぐとぎれながらもまた男が女にかまう様子は、しだいに露骨になった。しかしウナイコが怒りのそれであれ、救いをもとめるそれであれ、大きい声をたてることはなかった。小河氏〔伯父〕の方も、執拗なかまい方にはちがいないけれど、時には笑い声をまじえてのやりとりが続いていた[71]。

次の朝、古義人の妹アサは、「当然ですが、ウナイコはショックを受けてます」[72]と言う。役者であるウナイコは、笑っている時には演技をしていて、ショックを受けている時には素に戻っているのだと理解すべきなのだろうか。たとえウナイコが伯父をはめるのに嫌悪感を感じつつその本心を隠しているとしても、それでもこのエピソードは癇に障る。慰安婦は「職業としての売

67
大江『水死』、36ページ。Ōe, *Death by Water*, p.21.

68
朴「『水死』――新しい共同体のために」、618ページ。

69
大江『水死』、482ページ。Ōe, *Death by Water*, p.383.

70
前掲、510–511ページ。Ibid., p.407.

71
前掲、521ページ。Ibid., p.418.

春婦」であり謝罪の必要はない、などと称するのが、旧日本軍を免罪する歴史修正主義者のお得意のやり口の一つであることを考えれば、なおさらそうである。

厄介なことに、『水死』は、「女性の求めるもの」は知りえないという公理を引き合いに出すことで、解決を成し遂げているように見える。この考えが、女性のセクシュアリティを「暗黒大陸」[73]と呼んだフロイトに由来することは有名である。ラカンもこの考えを共有しており、女性の快楽を理解したいなら、ローマに行ってベルニーニの「聖テレジアの法悦」の像を見るべきだ、という発言を残している。ラカンが言うには、女性本人に聞くことができない理由は、「女性のものである享楽があり、それは「彼女」に属するが、存在せず何も意味しない」[74]からだという。これは、ラカンを介して広く知られるようになった、意味作用についてのソシュールの定式の一部である。ひとたび現実界との「切断」が生じて初めてシニフィアンとシニフィエが結合する、というだけではない。それに加えて、ラカンにおいてはしばしば、「現実界」そのものが母なる女性的なもので、そこにある何も意味しえない究極のものの一つが「女性の享楽」なのである。

もしかしたら、大江はこのことを念頭において、ウナイコの劇団を「穴居人」——文字通り、「穴の中に住む人間」——と名付け、それに「ザ・ケイヴ・マン」とルビを振ったのではないか、という考えが頭をよぎる。劇団の表向きのリーダーは穴井マサオという男性だが、彼の苗字は文字通り、「穴という深い井戸」を指す。もし穴井が言うように、「穴居人（ザ・ケイヴ・マン）」という劇団が志すのが、「長江さん〔古義人〕の全作品を読み返し」[75]、また「長江さんのお仕事全体を見わたした演劇のプラン」[76]を作ることだとすれば、小説中で劇団を批判する人々が冷やかしているように、メンバーたちは「長江の穴に住む人」[77]なのかもしれない。だが、その穴が意味のある言語の中で旋回し続けるのはただ、彼らのうちの一人・ウナイコがその穴そのものであるからだ。表象のシステムを根拠づけるのは、「表象のシステムそのものを可能にしている「穴」」もしくはアポリアである[78]、という柄谷の公理を批判するのに、これ以上に鮮烈な方法を想像するのは難しい。

この流れで行くと、ウナイコとリッチャンは二人合わせて、1970年代のリブ運動の中でフェミニストたちが理論化した二種類の女性のカテゴリーを想起させると言えるかもしれない。重松セツはこれらのカテゴリーが、相互に定義し合う期待役割の集合体に帰着し、さらにこれらの期待役割が戦後期にまで遡るのを見て取っている。つまり、貧しく唾棄の対象となる女性は「男性の欲望」の掃き溜めの役割を担わされ、そのおかげで、裕福で守られた女性が母として国家に奉仕できる、というわけである。田中美津の1970年のマニフェスト「便所からの解放」を引用して、重松は次のように述べている。「日本

73
Sigmund Freud, “The Question of Lay Analysis,” *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, translated and edited by James Strachey, Vol. 20, London: Hogarth, 1959, p. 212.〔ジークムント・フロイト「素人分析の問題」、石田雄一・加藤敏訳、加藤敏編『フロイト全集第十九巻（1925–28年）』、岩波書店、2010年、140ページ。〕

74
Jacques Lacan, *On Feminine Sexuality the Limits of Love and Knowledge: The Seminar of Jacques Lacan, Book XX Encore*, edited by Jacques-Allain Miller, translated by Bruce Fink, New York: W W Norton, 1998, p.74.〔ジャック・ラカン『アンコール』、藤田博史・片山文保訳、講談社選書メチエ698、講談社、2019年、133ページ。〕

75
大江『水死』、82ページ。Ōe, *Death by Water*, p.58.

76
前掲、44ページ。Ibid., p.28.

77
前掲、404ページ。Ibid., p.318.

78
柄谷『歴史と反復』、6ページ。Karatani, *History and Repetition*, p.3.

の女性を便所と理想化された妻・母に分断したイデオロギー的なジェンダー構造が、慰安婦が作り出され陵辱された元凶であった」[79]。重松の説明によれば、この構造を打破するためのリブの主たる戦略は、セックスワーカーも含め、犯罪者や唾棄の対象と見なされた女性に寄り添うことであった[80]。これを『水死』の文脈で考えてみると、どうなるだろうか。リッチャンは東京芸大というエリート大学の音楽の学位を持っている。対照的に、この小説が「衝撃的な結末」に至る前でさえも、劇団の男性たちとウナイコの関係はといえば、自分個人の芝居を優先させる彼女に罰を与えようとして、彼らが「老・長江をからかう」[81]魂胆で彼女の裸の写真を送りつけるといった具合であり、ウナイコ自身は、こんなことが平然と行われてしまうような情況自体が「女性差別」だと言う。小説の最後でアサは、きっとウナイコは「森の家」での性的暴行から立ち直り、リッチャンは東京でアカリの専従の介護者（ケアギバー）として働くために四国を後にするのだ、と強く信じている。この分岐は、唾棄の対象とされる人々との連帯のための余地をほとんど残さない。そこにあるのは、誰にとってであれ、「便所からの解放」ではないのだ。

それと同時に、理想化された女性と「便所女」という二つのカテゴリーそれ自体がまさしく二項対立であるさまが見て取れる。中央と周縁、尊敬の対象と唾棄の対象といった対と同じく、これら二つのカテゴリーもまた、歴史の上で、そして概念の上で、独立には存在しえない対立物として機能するかもしれない。とすれば、専従の介護者（ケアギバー）になるというリッチャンの決意を予兆する場面で、ウナイコが二項対立を無効化する発言をするのは興味深い。そこでウナイコは次のように述べる。

> リッチャンをそれだけ頼りにしていながら、リッチャンがわたしより他の人のために働いて、もっと素晴しいことをやるはずはない、と……確信してました。それが、「森の家」でリッチャンとアカリさんが音楽のレッスンをやって、作曲が進む、それが音になるのを聴くと、これはあきらかに、リッチャンがわたしの傍に助けに来てくれるより以上のことだ、そしてそれが新しいところへリッチャンを押し上げてもいる、と感じました[82]。

この小説はここで、「ひとつではない周縁（マージン）」としてのニューロダイバーシティを用いて、新たなタイプの創造的な労働のための余地を生み出している。リッチャンは自分ではスティミングや反響動作をするわけではない。だが、スティミングや反響動作、その他アカリの行うすべてのことをやってみせるような誰かのパートナーになることが、起源における〔シニフィアンとシニフィエの間の〕結合のために「穴」に依存することのない記号論のプラクシスに彼女を触れさせる。彼女は劇団「穴居人（ザ・ケイヴ・マン）」をやめて、そのような相手とコンビを組むのだが、この相棒が何を望んでいるのかは全く明らかではないだろうし、

79
Setsu Shigematsu, *Scream from the Shadows: Women's Liberation in Japan*, Minneapolis: University of Minnesota Press, 2012, p. 71.

80
Ibid., p. 93.

81
大江『水死』、303ページ。Ōe, *Death by Water*, p. 239.

82
前掲、450–451ページ。Ibid., p. 357.

かといって事実問題としては、全く表象不可能だというわけでもないだろう。具体化したコミュニケーションの空間で働き、このコミュニケーションを「音の形に」することで、リッチャンは古義人自身がこれまでやってきたことよりも、もっとずっと進化した新しいことをやっていくだろう。リッチャンとアカリが二人で打ち込むようなタイプのケア労働は、決定的な「最後の類型」も解決不可能な「晩年のスタイル」も生み出さない。ニューロダイバーシティのケアとセルフケアは、私たちをより賢明かつ創造的にして前に進んでいくのだから、幼年の時間性に属し、晩年の時間性には属さない。それらは常に、今まさに始まりつつあるものなのだ。

［参考文献］

「「岩波ブックレット」刊行の言葉」、岩波書店、1982年4月。〔以下に挙げるものも含め、すべての岩波ブックレットの裏表紙裏に記載。〕

大江健三郎「九条を文学として読む」、大江健三郎・内橋克人・なだいなだ・小森陽一『取り返しのつかないものを、取り返すために――大震災と井上ひさし』、岩波ブックレットNo.814、岩波書店、2011年、38–58ページ。

大江健三郎「「さようなら原発」のラリーに加わる」、鎌田慧編『さようなら原発』、岩波ブックレットNo.824、岩波書店、2011年、16–22ページ。

大江健三郎『水死』、講談社文庫お2-21、講談社、2012年。

大江健三郎『読む人間』、集英社文庫お18-3、集英社、2011年。

柄谷行人『歴史と反復』、『定本柄谷行人集』第五巻、岩波書店、2004年。

小森陽一「拮抗する言葉の力――大江健三郎『水死』を読む」、『世界』第803号、2010年4月、岩波書店、210–217ページ。

時渝軒「1980年代以降の大江健三郎小説における自作リライトの手法」、『大江健三郎全小説』第十一巻、講談社、697–712ページ。

NHK『響きあう父と子――大江健三郎と息子光の30年』（59分のドキュメンタリー）、NHKスペシャル、1994年。www.youtube.com/watch?v=EfiMZht-yiE

朴裕河「『水死』――新しい共同体のために」、『大江健三郎全小説』第四巻、講談社、615–619ページ。

Autism Speaks. “Applied Behavior Analysis (ABA).” 2021. www.autismspeaks.org/applied-behavior-analysis

Baggs, Mel. *In My Language*. Video. YouTube, January 14, 2007. www.youtube.com/watch?v=JnylM1hI2jc

Bailin, Ayana. “Clearing Up Some Misconceptions about Neurodiversity.” *Scientific American Blog* (June 6, 2019). https://blogs.scientificamerican.com/observations/clearing-up-some-misconceptions-about-neurodiversity/

Broderick, Alicia and Ali Ne'eman. “Autism as Metaphor: Narrative and Counter-Narrative.” *International Journal of Inclusive Education* 12, no.5-6 (2008): 459–476. DOI: 10.1080/13603110802377490

Cameron, Lindsley. *The Music of Light: The Extraordinary Story of Hikari and Kenzaburō Ōe*. New York: Free Press, 1998.

Den Houting, Jacqueline. “Neurodiversity: An Insider’s Perspective.” *Autism* 23, no. 2 (2019): 271–273. DOI: 10.1177/1362361318820762

Freud, Sigmund. “The Question of Lay Analysis.” *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud* Vol. 20. Translated and edited by James Strachey. London: Hogarth, 1959, pp. 179–263.〔ジークムント・フロイト「素人分析の問題」、石田雄一・加藤敏訳、加藤敏編『フロイト全集第十九巻（1925–28年）』、岩波書店、2010年、103–199ページ。〕

Imafuku, Ryuta. “Masao Yamaguchi: A Hermes-Harlequin in the Field of Semiotics.” *The Semiotic Web* 1987. Edited by Thomas Seboek and Jean Umiker-Sebeok. Berlin: De Gruyter, 1988, pp. 93–108. DOI: 10.1515/9783110868388

Karatani, Kōjin. *History and Repetition*. Edited by Seiji M. Lippit. New York: Columbia University Press, 2012.

Lacan, Jacques. *On Feminine Sexuality the Limits of Love and Knowledge: The Seminar of Jacques Lacan, Book XX Encore*. Edited by Jacques-Allain Miller. Translated by Bruce Fink. New York: W W Norton, 1998.〔ジャック・ラカン『アンコール』、藤田博史・片山文保訳、講談社選書メチエ698、講談社、2019年。〕

Nolan, Jason and Melanie McBride. “Embodied Semiosis: Autistic ‘Stimming’ as Sensory Praxis.” *International Handbook of Semiotics*. Edited by Peter P. Trifonas. Dordrecht: Springer, 2015, pp. 1069–1078. DOI: 10.1007/978-94-017-9404-6_48.

Ōe, Kenzaburō. *Death by Water*. Translated by Deborah Boliver Boehm. New York: Grove Press, 2015.

Ōe, Kenzaburō. “Japan’s Dual Identity: A Writer’s Dilemma.” *World Literature Today* 62, no. 3 (Summer 1988): 359–369.

Said, Edward. *On Late Style*. New York: Vintage, 2006.〔エドワード・W・サイード『晩年のスタイル』、大橋洋一訳、岩波書店、2007年。〕

Shigematsu, Setsu. *Scream from the Shadows: Women’s Liberation in Japan*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2012.

Yergeau, M. Remi. *Authoring Autism: On Rhetoric and Neurological Queerness*. Durham, NC: Duke University Press, 2017.

Yoneyama, Lisa. *Cold War Ruins: Transpacific Critique of American Justice and Japanese War Crimes*. Durham, NY: Duke University Press, 2016.